



# トイレ診断士の厠堂本舗 I know IBDプロジェクトに参加

下痢や腹痛などを伴う病気、「IBD(炎症性腸疾患)」や、その患者さんにトイレを貸し出し、外出時の不安を軽減させる「I know IBDプロジェクト」については前号のかわや版でもお伝えしました。

横浜市のアメニティ本部内にある公共トイレ「トイレ診断士の厠堂本舗」は、これまでも就業時間内であれば地域の方や通りすがりの方が自由に使えるトイレとして開放してきましたが、今回、より多くの方にIBDについて知ってもらいたいという思いからI know IBDプロジェクトに参加することとなり、6月10日より利用を開始しました。このトイレ診断士の厠堂本舗は

全国のアメニティショップのスタッフやトイレ診断士の研修の場でもあります。そういったところからもIBDに対する認知が広がっていけばと期待しています。

トイレ診断士の厠堂本舗の入り口に掲げられたI know IBDプロジェクトのステッカー



IBD(炎症性腸疾患)とは潰瘍性大腸炎とクローン病の総称で、大腸や小腸などに炎症を引き起こし、下痢や腹痛を伴う原因不明の難病。10代から20代での発症が多く国内での推計患者数は約29万人。見た目ではわかりにくい、食事の制限やトイレの回数の急増など日常生活に影響を及ぼす。

I know IBDプロジェクトについてはこちらからも詳細をご覧ください。



## 日本水循環文化研究協会



特定非営利活動法人日本水循環文化研究協会とは…本コラムでも取り上げられている尿関る文化や国内外の水の循環をめぐる文化の発掘、普及、継承を目指して活動しています。2022年日本下水文化研究会から改組しました。



今回もおなじみ、総合トイレ学研究者の森田英樹さんにお話を伺いました。

### “九分九厘”のはなし

今回は「しゃがまない」はなし」と題して排泄姿勢についてお話をいたしました。今回も引き続き排泄姿勢についてお話をいたしましょう。

あの忌わしいコロナも5類扱いとなり、日常生活もコロナ以前に戻りつつあります。海外からの観光客も増加し、観光地は外国人で賑わっているようです。思い起こせばコロナ以前には、外国人観光客が和式・洋式トイレの使い方がわからず困り果てたり、間違った使い方をしたため、管理者が清掃に頭を痛めたり等々、様々な課題がありました。そのため、公共トイレや個人店舗のトイレでさえ数ヶ国語でトイレの使い方を説明した文書が貼ってあるのを良く目にしました。絵心のある場合は手書きで使用図を描くなど各トイレで涙ぐましい工夫がなされていました。そんな中、太宰府で衝撃的な出

会いがありました。なにげなく洋式トイレの個室を覗くと、便器の前に白くペイントされた足跡マークが描かれていました。特に気に留めることもなく立ち去ろうとした瞬間、外国人観光客の姿が目に入りました。もしかすると…これは！急ぎ、和式トイレの個室を覗くと、やはり便器を跨ぐように白い足跡マークが描かれています。なるほど、このマークに自分の足を合わせ、徐々に体勢を下げれば『九分九厘』正しい排泄姿勢になる仕組みか！マークひとつで、これほど単純明快に使い方が説明できるとは、目から鱗が落ちる思いでした。

ところで、あえて『九分九厘』と言いましたが残りの『1厘』は何なのか？と思われるかも知れません。私たちは、排泄姿勢はしゃがみ式・腰掛式の2通りだと思っていますが、いやいやそんな事はありません。台湾原

住民族のアミ族やサイシャット族は、昔は中腰で大便をしました。また、バブアニューギニアでは、歩きながらの『立ち大便』も報告されています。どちらも現在では消滅した文化かもしれません。しかし、世界は広くトイレ文化は奥深いものです。念のため『1厘』は残しておきましょう。



### 編集後記

THE TOKYO TOILETプロジェクトを何十年後に振り返った時、「あのプロジェクトが公共トイレの概念を変えたよね」というような歴史や文化、大衆の意識の転換点になるのではないかと個人的には思っています。今回のインタビューでその生みの親である柳井康治さんの、我々では思いつかないような発想と行動力を垣間見ることができました。次回インタビューの後編もお伝えしますので是非楽しみに。(セルベッチオ中嶋)

### Information!

第40回全国トイレシンポジウムが開催されます。

日程: 2024年11月20日(水)

会場: 東京ビッグサイト

主催: 一般社団法人日本トイレ協会

参加費: 無料



トイレを楽しくする新聞

# かわや版

KAWAYABAN

2024 秋号  
Vol.110

# THE TOKYO TOILET 柳井康治氏インタビュー

世界で活躍する16人のクリエイターにより  
東京・渋谷区の17ヶ所の公共トイレを  
生まれ変わらせた

THE TOKYO TOILET(以下TTT)プロジェクト。

TTTを舞台に役所広司さんがトイレの清掃員を演じた

映画『PERFECT DAYS』でも話題を集め、

公共トイレをとりまく環境に

新たな風を起こしています。

プロジェクトの発案者で資金提供も行っている

柳井康治さんに、TTTのトイレ診断を担当している

山戸伸孝(弊社代表)がお話を伺った模様を

前後編でお伝えします。



柳井康治  
株式会社ファーストリテイリング  
取締役 グループ上席執行役員  
1977年生まれ。横浜市立大学  
卒業。三菱商事株式会社を経て、  
2012年株式会社ファーストリ  
テイリング入社。

### すべての人が関わる何かを

山戸: 弊社のある横浜は実は公衆トイレ発祥の地なんです。浅野総一郎さんという実業家の方が私財を投げうって公衆トイ

レを作ったというのが日本の公衆トイレの始まりと言われてます。今回のTTTのプロジェクトはそれと同じく、後世に語り継ぐべきものだと思っていますが、なぜこの取り組みを始められたのでしょうか?

柳井氏: 最初のきっかけは2020年のオリンピック・パラリンピックが東京に決まったことです。2016年でした。個人的にはオリンピックよりパラリンピックが盛り上がる大会になったらいいなと思っていました。その時は「おもてなし」という言葉がすごく人気で、もてはやされてきたけど、いったいどういったところにおもてなしというものが表現されていると本当に良いおもてなしを受けたとを感じるのか?と考えた時に、オリンピックじゃなくてパラリンピックの方が盛り上がる大会になれば、おのずといろいろな人がケアされて日本っておもてなしの心がすごいって事になるんじゃないかろうかと思ったんです。それでおもてなしと言ったからには、これから街が変わっていくのかなと結構楽しみに待っていたのですが…。



2,3ページに続く

### あなたの町のアメニティネットワーク

アメニティ本部フリーダイヤル ☎0120-57-1110



青字…山戸  
黒字…柳井氏



待てど暮らせど変わる気配がなかったと…。

変わらなかったですね。これはもう自分なりにおもてなしを表現した方がいいんじゃないだろうかという発想に切り替わっていきました。パラリンピアンとか、いわゆる障害を持っていらっしゃる方が喜ぶようなことって何かかと思っっているいろいろ考えてはいたのですが、昔、父と交わした会話を思い出したんです。「人間っていうのは一人一人全員違って、LGBT今だとQプラスとかいろいろあるけど、人っていうのはそう簡単にくくれる単純なものじゃない。ユニクロは、男性も女性も、すべての性の人たちも、障害をお持ちの方も、国籍も宗教も政治も関係なく、みんながアクセスで

## THE TOKYO TOILET 柳井康治氏インタビュー

きるブランドをやっている。そういう考え方であるべきだ」という話だったんです。ああ、確かにと思って。僕が今やろうと思っているのは、障害をお持ちの方とか、パラリンピックだけが盛り上がるような話で、その精神からはちょっとずれちゃっているなと思ったので、やっぱりユニクロ創業家の人間として何かやるからには、同じような発想のもと、すべての人に関わることをやるのが良いんじゃないだろうかと思って。あらゆる人に開かれたことが何なのかを考え始めました。

それで忙しい時に徹夜して仕事を仕上げたとか、今日ランチ食べれなかったとか、そういう日はあっても、今日1回もトイレ行かなかったって日はないっていうことにある日ふと気がついて、ジェンダー、世代、障害の有無、国籍、宗教などに関係なく、みんなトイレには行くなと。だから、トイレだったら本当にみんなに関わる話になるから、トイレが素敵な状態になってるっていうのは、おもてなしの一つになるに違いないさそうだったんです。

海外の出張にたくさん行かせてもらっていますけど、日本のトイレって海外のトイレに比べると圧倒的にクオリティが高い。なので、やっぱり日本ってトイレがすごくなって思ってもらうのは、それはそれで面白いなと思って。公共の場所にあるトイレがすごく快適だったらみんな喜んでくれるかなというのが最初の経緯ですね。

それで日本財団にお話しされたということですね。

自分一人で考えていても進まないの、2018年ごろに日本財団の常務理事(当時)の笹川順平さんにご相談して、最初は漠然とTOKYO2020だから東京中、例えば23区に1個ずつそういう公共トイレがあったらいいなって。でもそれだと全部許可取るのが大変だということで、日本財団とソーシャルイノベーションに関する協定を結んでいる渋谷区に絞ってやりましょうということになりました。僕も渋谷区民ですしね。

### 公共のトイレを変えていく取り組み

最初は柳井さんの名前は出さずにTTTがスタートしましたよね。

メディアでの取り上げられ方とか、世間の方の反応というのは、時として予想せぬことが起こるので、自分の名前ではなく、まずは真っ直ぐにこのプロジェクト自体を受け止めて欲しいと思いました。それで日本財団のプロジェクトとして進めて頂くことになりました。



2020年8月にTTTプロジェクト第一弾として、透明トイレで話題となった坂 茂氏の「はるのおがわコミュニティパークトイレ」「代々木深町小公園トイレ」がオープンしました。同時期にオープンした片山正通氏の「恵比寿公園トイレ」前で行われた完成発表会には多くの報道陣が詰めかけました。



撮影:永禮賢 提供:渋谷区

## THE TOKYO TOILET 柳井康治氏インタビュー

それがだんだん隠し切れなくなっていくんですね。

2020年の夏に坂 茂さんの透明なトイレがすごく話題になっていたので、これは隠しきれないねって笹川順平さんと話して、その頃に初めて両親や家族にも話して「そんなことやってたの?」って言われて、いや、実はそうなんだよなって。2020年の末あたり、第一弾でできあがったトイレが共用を開始して少し経つあたりまでは、渋谷区長も僕が存在をご存知なかったかも知れません。

著名な方にクリエイターとしてご参加いただいていますよね。

悩んだポイントでした。ただ、考えたのは、まずは、これまでも数々の意識変革みたいなものを世の中に起こしてこれらのような実績のあるクリエイターの方を中心に、やっぱりこれ以上ないっていう新しいものをポンと提示してもらって、さすがだとか斬新だとか画期的だとかプロジェクト自体を前向きに捉えてもらう環境を作り出したかったんです。そうやってプロジェクトが認知されてから、さらに新しいものを出して、こういうの前あったよね、あれのまたさらに進化形かということで受け止めてはもらいたいと思って。あえて実績がある、もう名前を聞いたらみんなが知ってる、いろいろ斬新なものをこれまで創り出してこられた方々を中心にお声掛けをしてやっていただきました。

もっと若手にチャンスを与えるべきという声もあったかと思いますが…。

はい、それはもう言われるなって。大御所ばかり声かけて、そこがもったいないみたいなことを言われるというのは、もう分かった上です。ただ、才能はあるかもしれないけれどまだ世の中に認知されていないクリエイターさんとかアーティストの方がすごく斬新なアイデアとか前例にないことをすると不謹慎って言われがちな気がしたんですよね。それで、それは第二弾以降で実現すれば良いやって考えるようにしちやいました。兎に角、第一弾は絶対に成功しなきゃいけない、絶対に話題にならなきゃいけない、絶対に認めてもらわなきゃいけない、批

判の声があっても、それを封じ込めるぐらいのビッグネームの人でやってみたい。この人たちが参加してるってことは、それだけ大きな社会問題なんだってみんなに認識してもらってということが、まずは何より大事で。だから著名な方にこだわってみました。

### クリエイターへの依頼秘話

クリエイターの方への依頼なども直接されていたのですか?

基本的には全部自分でお会いしてお願いしました。笹川順平さんの知り合いの方がいらっしゃる時は、アポイントをお願いして一緒に行ったりとかもありました。「ユニクロの柳井ですけど…」って秘書の方にお電話したりメールしたりして、怪しまれたりしながらお会いしていききました。もちろんお受けいただけなかった方もいらっしゃいます。うちの会社は朝7時から就業なので早い時は16時過ぎぐらいには終わることもあるので、アポを全部16時以降にしてもらって、お一人お一人皆さんのところにお会いに行つて、「実はこういったことを考えているのですが参加していただいけませんか?」と。中にはユニクロの仕事をさせていただいている方もいらっしゃるの、オフィスですれ違った時に「すみません!ちょっと5分

だけいいですか?」ってお話ししたりして、皆さんにお願いして回りました。

聞いたこともないようなプロジェクトで皆さん戸惑われたのではないのでしょうか…。

そうですね。「どういうふうにとったらいの?」と言われても「好きなようにデザインしてもらって構いません」みたいなことから始まるので、そういうのってあまりこういうプロジェクトではないですよ。あと、このクラスの方々が同じプロジェクトに参加することはあまりなくて、大概コンペで集まったアイデアの中から一個に決まって、他のアイデアは実現しないというパターンが多いんですけど、一つのテーマでみんなの答えが見れちゃうっていうのはあまりないかもしれませんね。

第一弾の6か所ぐらいのトイレが出来上がって、それがインパクトを持ってメディアで取り上げていただいたので、その次の工期の方たちは「注目度が上がった状態だったので、後になればなるほど嫌だった」っておっしゃっていましたが、皆さんがより本気で向き合うきっかけになったとしたら、それは良い効果だったかなと思っています。

後編に続く



次号のかわや版では引き続き柳井康治さんに、TTTプロジェクトの要でもあるアートのお話を掘り下げてお伺いしています。ご期待ください。